

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870305

研究課題名(和文) 植民地朝鮮における野球の受容と展開に関する歴史学的研究

研究課題名(英文) Historical Study on Korean Baseball in Colonial Period

研究代表者

小野 容照(Ono, Yasuteru)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：00705436

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は植民地朝鮮における野球の受容と展開過程を解明し、なぜ今日の韓国野球は日本化しているのかを考察することであった。今日の韓国野球が日本化している要因は、植民地支配政策というよりも、朝鮮人が日本を経由して野球を導入したことに求められる。しかしその一方、そうした野球の導入背景には、韓国保護国化への抵抗運動や植民地化後の民族運動に活用する目的があった。したがって、技術的起源は日本だったかもしれないが、こうしたナショナリズムこそが朝鮮野球を発展させたといえる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the reception and development process of baseball in colonial Korea and to explain what made today's Korean baseball "Japanized". Although Japanese had tried to utilize baseball for colonial policy such as imperial assimilation in colonial period, Korean nationalists had already introduced it into Korean Peninsula through Japan voluntarily before the annexation of Korea in 1910. Despite the fact that technical aspects of Korean baseball originated in Japan, Koreans accepted baseball as a means of national movement. Therefore such nationalism served as important driving forces behind the development of Korean baseball.

研究分野：朝鮮近代史

キーワード：朝鮮 植民地 部活動 野球 ナショナリズム スポーツ

1. 研究開始当初の背景

近年、大韓民国において野球は、2008年の北京オリンピックでの優勝などを背景として人気が高まり、サッカーと並ぶ韓国の国民的スポーツと評価されるようになった〔『朝鮮日報』2012.9.25〕。しかし、「野球 (Baseball)」という競技名から「安打 (Hit)」といった専門用語に至るまで、韓国では明治以降に日本で翻訳された漢字の野球用語を使ってきた。韓国の野球が国内外で注目を集めながらも、かつての統治国である日本の野球用語を使い続けているという状況を克服するために、2000年代後半から韓国では野球用語の改訂運動が起こった。その結果、「防御率 (Earned run average)」が「平均自責点」に変更されるなど、韓国独自の野球用語が増え始めた。つまり、日本式野球用語を使うことは「国民的スポーツ」となった韓国野球にはそぐわないものと認識され、そこからの脱却 韓国野球の脱日本化 が目下の韓国のスポーツ界の重要な課題となっているのである。

しかし、韓国野球の現在に関する議論が活発化する一方で、アメリカ生まれの野球が韓国ではなぜ日本化したのか、そもそも、朝鮮半島に野球はどのようにして伝わり、今に至っているのかという歴史的背景については、十分に明らかになっていない。かかる状況を受けて、朝鮮半島にいつ野球が流入したのかを解明せんとした論考が最近韓国で発表されたが〔孫煥「韓国最初の野球競技に対する考察」『韓国体育学会誌』50-5, 2011, 原文朝鮮語〕、朝鮮の野球史についての歴史研究は今まさに本格化しようとしているところであり、研究蓄積は依然として少ない。一方、植民地期を含めた近代朝鮮のスポーツ史研究でも野球について断片的に触れている〔羅絢成『韓国体育史』1963, 李学来『韓国近代体育史研究』1990, とともに原文朝鮮語〕。しかし、これらの研究は、1) 日本が朝鮮人のスポーツ活動をどう弾圧したかを糾弾し、2) それに対する朝鮮人の抵抗を解明することに主眼を置いている。そのため、野球を含めた近代朝鮮のスポーツ全般に、日本やその他の諸外国がいかなる影響を及ぼしていたのかという点が十分に考察されていない。

しかしながら、野球を含めて、朝鮮で行われていた近代スポーツは、全て西洋に起源する、朝鮮の外部から流入したものである。さらに野球の場合、発祥国のアメリカのみならず、用語の例に見られるように日本からも現在に至るまで多大な影響を受けてきた。したがって、朝鮮に野球がどのように伝わり、どう展開し、そして今に至るのかという歴史的経緯を解明するためには、同時代の日本やアメリカの野球や社会状況、とくに前者との相関関係に常に着目する必要がある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、上記の問題関心に基づ

き、アメリカの影響が強かったと考えられる1890年代の野球の伝来から、日本の影響が増大すると想定される1910~1945年の植民地支配の終わりまで、朝鮮半島における野球の受容と展開過程を分析する。

具体的には、韓国併合以前の野球伝来におけるアメリカの影響と、日本の朝鮮進出に伴う日本の影響を対比的に分析することで、今日まで日本野球が絶大な影響を及ぼしている要因を解明する。

また、植民地社会において、野球が支配当局や朝鮮人にとってどのような役割を果たしていたのか、その社会的位置づけを検討する。

3. 研究の方法

(1) まず分析の視覚としては、朝鮮に流入して定着していく過程を、朝鮮人が自主的に日本野球から学んだ可能性 朝鮮を訪れたアメリカ人宣教師・選手の影響 植民地支配の影響、という三つの要素に着目して検討する。これらの三要素を、A) 韓国併合前 B) 武断政治期 C) 文化政治期 D) 戦時期 / 皇民化政策期という四つの時期に分けて考察することで、野球の受容過程と性格・社会的位置付けの変遷を段階的に解明する。

(2) また、朝鮮の野球は、アメリカ起源の野球が、日本の影響を受けながら定着するというグローバルな現象である。そこで、朝鮮野球の歩みをトランスナショナルな観点から分析するために、アメリカのMLBや日本の甲子園大会、都市対抗野球大会、職業野球など、日米の野球イベントの朝鮮への拡大という視点も導入する。

(3) 史料については、朝鮮のスポーツに関する史料はあまり知られていない。その発掘作業から本研究は出発することになる。まず『東亜日報』をはじめとする朝鮮語の新聞はもちろん、『朝鮮体育会』といった朝鮮のスポーツ雑誌を収集する。また、戦前の日本では、『アサヒスポーツ』といったスポーツ雑誌や甲子園を主催する『朝日新聞』がスポーツ報道に富んでいるが、そのなかには朝鮮に関するものも多い。とりわけ、『朝日新聞』の外地版 (朝鮮版) は、朝鮮のスポーツに関する情報の宝庫であり、積極的に活用する。アメリカに関しては、野球の伝来に重要な影響を及ぼした宣教師関係の文書、MLBのアジアツアーについて報道している新聞などを活用する。

4. 研究成果

(1) 韓国併合以前については、アメリカに留学していた朝鮮人とアメリカの宣教師が野球の導入の担い手であったが、1905年の韓国保護国化を前後して日本に留学する朝鮮人が増加するなかで、日本経由による野球の受容へと構造が転換したことを解明した。

韓国保護国化以前、アメリカ人宣教師らから野球が伝わった際は、娯楽や余暇の楽しみの意味合いがあった。しかし、保護国化により国家が危機に瀕すると、民族意識の高揚や身体作りの観点から野球を抵抗運動に活用する傾向が強まる。その際、日本を通して野球が受容されたのは、朝鮮人にとって日本が最も身近な「近代空間」だからであり、朝鮮人の日本経由による野球の受容は、日露戦争以降、東アジアの諸民族が日本から近代知識を導入して各国の近代化に役立てようとした現象の一コマとして位置付けられる。

(2) 1910年以降の武断政治期においては、朝鮮総督府は甲子園の朝鮮地区予選を中止させるなど、朝鮮人が日本人と野球で試合をして、これが双方のナショナリズムを効用させることを懸念していたこと、一方で朝鮮人側は民族運動の手段として野球を活用していたことを解明していた。

もっとも朝鮮総督府も一枚岩でなく、治安当局や学務局などはスポーツや日本人と朝鮮人の対抗試合を警戒していた反面、鉄道局はスポーツ振興に熱心であり、とりわけ野球とテニスの普及に努めていた。朝鮮人との野球の対抗試合にも積極的であったため、たびたび日朝対抗戦が開かれた。こうした鉄道局と朝鮮人の対抗戦は、朝鮮人のナショナリズムを高揚させる役割を果たし、朝鮮野球とナショナリズムの結びつきが強まることとなった。

(3) 1919年の3・1独立運動後、朝鮮総督府の政策が文化政治に転換し、内鮮融和がスローガンになると、一転して、朝鮮総督府は野球を融和政策に活用することを目指し、朝鮮でも甲子園や都市対抗野球大会の予選がはじまったことなどを解明した。

かつて武断政治期に甲子園の朝鮮予選を禁止にした朝鮮総督府も、今度は内鮮融和の観点から朝鮮人学校の甲子園地区予選参加を奨励した。しかし、文化政治により、朝鮮人だけの野球大会も開催が可能となったため、当初、朝鮮人学校は甲子園地区予選に参加しなかった。しかし、最新鋭の野球場や大会の規模など、朝鮮人学校にとって甲子園は魅力的なものであり、結局は朝鮮人学校が多数参加、日本人学校を凌駕するようになる。

朝鮮人学校の選手や観衆たちが求めたのは日本人学校を倒し頂点に立つことであり、その意味でナショナリズムの要素は残る。ただ、朝鮮人主催の朝鮮人だけが参加する野球大会ではなく、多くの朝鮮人学校が甲子園を目標にするようになったことは、帝国日本の文化的ヘゲモニーが朝鮮人に浸透する過程を示すものである。

(4) 満州事変以降、皇民化政策が進展していくに伴い、野球の皇民化への活用が活発化し

ていったことを解明した。甲子園の朝鮮地区予選では、開会式に「皇国臣民の誓詞」の斉唱、皇居遥拝、国旗掲揚などが組み込まれた。また、日本語普及の観点から英語の野球用語の使用が禁止されたほか、ユニフォームのアルファベット表記も学務局長の指示により禁止となった。

加えて、徴兵制や陸軍志願兵制度と関連して、体位向上の観点から野球部を含めた運動部の自粛も、地域的偏差はあるが、広がっていった。

ただし、朝鮮人経営の学校の野球部を中心に、こうした政策を間接的ではあるが拒否する動きもみられた。地区予選のプログラムやユニフォームなどは指示に従うものの、運動部の自粛については朝鮮総督府が命令したものでなかったため、朝鮮人が校長を務める学校ではこれに従わないことも多く、戦時期には日本人が校長を務める公立校の野球部が自発的な廃部を決定する一方、朝鮮人経営の民族学校で野球部の活動が存続するという現象がみられた。

(5) 結局、今日の韓国野球が日本化している要因は、植民地支配政策というよりも、朝鮮人が、彼らにとって最も身近な「近代空間」である日本を経由して野球を導入したことに求められる。しかしその一方、そうした野球の導入は韓国保護国化への抵抗運動や植民地化後の民族運動に活用する目的が大きく、こうしたナショナリズムこそが朝鮮野球を発展させた。いわば日本に抵抗するために朝鮮野球が日本化していったのであり、その意味では、朝鮮半島で現在まで野球が根付き、そして日本化したことは、日本による朝鮮支配の産物であったと結論づけられる。

以上の内容は、2014年に武断政治期の野球界の動向を扱った論文1篇、文化政治期の甲子園の朝鮮地区予選を扱った論文1篇を発表した。また、戦時期については、2014年に朝鮮史研究会の大会で発表した。

2015年以降は論文を発表するのではなく、一冊の著書としてまとめることが肝要であると考え、分析と平行して著書の執筆を進めた。そして、2017年1月、本研究の集大成として、1890年代から朝鮮解放直後の1946年までの朝鮮野球史を描いた『帝国日本と朝鮮野球』を刊行した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

小野 容照、植民地朝鮮の甲子園大会朝鮮地区予選の設立と朝鮮人の参加をめくって、二十世紀研究、査読なし、第15号、2014年、43-67

小野 容照、早稲田大学野球部と朝鮮

近代日朝スポーツ交流史の断面、李成市・劉傑編『留学生の早稲田 近代日本の知の接触領域』、早稲田大学出版部、査読なし、2015年、260-300

(3)連携研究者

(4)研究協力者

()

〔学会発表〕(計 2 件)

小野 容照、植民地朝鮮とスポーツ 1930年代を中心に、朝鮮史研究会第51回大会、2014年10月3日、京都府立大学(京都市)

小野 容照、

1923

(植民地朝鮮と甲子園野球 1923年夏、日本野球界における韓流ブーム、朝鮮語)、世界韓流学会主催シンポジウム「韓流と日流」、2014年10月14日、韓国プレスセンター、韓国(ソウル市)

小野 容照、近代仁川における日本人と野球、神戸開港150年記念国際シンポジウム「仁川チャイナタウンと北東アジアの開港場」、2017年1月21日、中華会館東亜ホール(神戸市)

〔図書〕(計 1 件)

小野 容照、中央公論新社、帝国日本と朝鮮野球 憧憬とナショナリズムの隘路、2017、345

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

小野 容照(ONO, Yasuteru)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：00705436

(2)研究分担者